

Title	十九世紀ロシア社会史のテキストとしてのA・エンゲリガルト『農村から』：叙述の性格をめぐる問題
Author(s)	青木, 恭子
Citation	一橋論叢, 113(3): 363-378
Issue Date	1995-03-01
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	http://doi.org/10.15057/12235
Right	

十九世紀ロシア社会史のテキストとしての

A・エンゲリガルト『農村から』

——叙述の性格をめぐる問題——

青 木 恭 子

はじめに

一八六一年の農奴解放以後のロシア農村を研究する際に用いられてきた史料の一つに、アレクサンドル・ニコラエヴィチ・エンゲリガルトの『農村から、十二の手紙、一八七二年から一八八七年』（以下、『農村から』とする）がある。これは、雑誌に掲載された「農村からの手紙」という手紙形式の論文を一冊にまとめたものである。最初に単行本となったのは一八八二年のことであり、以後第七版まで出版されている。⁽¹⁾その内容は実に多岐にわたる。農民や農村の実態を伝え、ロシア農業の抱える問題点について分析し、将来進むべき方向を提言するなど、

様々な事柄がそこには書かれているのである。この『農村から』は農民や農村に関する史料として貴重な価値を持ち続けてきた。エンゲリガルトの正確な観察眼に基づく具体的な記述は信憑性が高く、しかも同時代の知識人全体に及ぼした影響も大きいのである。

エンゲリガルトとはどのような経歴を持つ人物であるか。⁽²⁾エンゲリガルトは一八三二年七月二一日（ユリウス暦による。以下同じ）にスモレンスク県ドゥホヴシチナ郡クリモヴォ村で生まれた。エンゲリガルト家は代々軍人の家系であり、父ニコライ・フォードロヴィチもまた軍人であった。十五歳まで父親の領地で過ごした後、エンゲリガルトもやはり軍人としての道を歩み始める。

一八四八年から一八五三年までペテルブルグのミハイロフスコエ砲術学校で学び、卒業後はペテルブルグ兵器廠に勤務し、大砲の鑄造の仕事に携わった。

エンゲリガルトは、兄ミハイルの影響もあって、化学にも興味を抱いていた。兵器廠に勤務するかたわら有機化学の研究を続け、一八五四年に最初の化学論文を発表している。また、化学者H・H・ソコロフと共同でロシア初の私設公開化学実験室を設立し(一八五七年)、ロシア初の学術化学雑誌『H・ソコロフとA・エンゲリガルトの化学雑誌』を刊行した(一八五九年〜一八六一年)⁽³⁾。一八六四年一月からは、ペテルブルグ農業大学で化学の講義を担当するようになった。

エンゲリガルトはまた当時の最新の科学にいち早く関心を示していた。彼はロシアにダーウインの思想を紹介した一人であり、後述するように、エンゲリガルトの考え方にはダーウインの思想が色濃く影響している。また、彼は一八四〇年代に磷酸肥料の実験を行ったドイツ人化学者リービヒに傾倒し、磷酸肥料の実験を終生続けている。

学生運動との関係で、エンゲリガルトは二度逮捕され

ている。一度目は一八六一年九月二七日のことであり、二度目の逮捕は、エンゲリガルトが兵器廠を辞してペテルブルグ農業大学の専任講師となり(一八六六年)、さらに同大学の学長に選ばれた(一八七〇年)後の、一八七〇年十二月一日のことであった。二度目の逮捕の結果、エンゲリガルトは教授の職を解任され、首都及び大学のあるすべての町に居住すること、そして外国に出ることを禁じられた。エンゲリガルトは、妻アンナと三人の子供たち(ミハイル、ヴェーラ、ニコライ)をペテルブルグに残して、単身スモレンスク県ドロゴブジュ郡バチンチェヴォ村の領地に移り住む(一八七一年二月五日)。

そこでエンゲリガルトは農業経営を始めるのである。これまで述べてきたように、エンゲリガルトは元自然科学者であった。軍人としての勤務経験もあった。そのような経歴の持ち主であることと、農業経営者であることは、エンゲリガルトの中では何ら矛盾してはいなかった。エンゲリガルト自身は語っているところによると、もともと彼は「農業経営には常に関心を抱いて」おり、「年金をもらうようになったら農村へ行く」⁽⁴⁾予定にしていたのである。

エンゲリガルトが「農村からの手紙」を『祖国雑記』に発表することになるきっかけは、エンゲリガルトとは妻同士が従姉妹という関係にある、作家で編集者のサルティコフ・チエドリンから勧められたことであつた。⁽⁵⁾以後、一八七二年から一八八七年まで十二回にわたつて「農村からの手紙」が『祖国雑記』及び『ヨーロッパ報知』に掲載されることになる。

「農村からの手紙」は大いに人気を博した。エンゲリガルトに影響された若い知識人が一八七七年から一八八四年までの間に約八十人も集まり、農業を身につけて「インテリ・ムジーク (Интеллигентные мужики)」となり、共同で農業を行うアルテリ村 (コロニー) を形成し、ロシアの農業を変えるための核となろうとした。しかし、一八七九年から一八八四年まで三回にわたつて作られたアルテリ村は、いづれも失敗に終わり、エンゲリガルトをひどく失望させた。⁽⁶⁾この活動に関しては、後にもう一度取り上げる。

晩年のエンゲリガルトの関心は専ら燐酸肥料の実験へと移つていった。燐酸肥料の実験の成果が認められて、一八九〇年には自由経済協会の名誉会員に選ばれた。そ

して、ペテルブルグに滞在することを許可され、農業省から補助金を受けられることになった。一八九三年一月二一日にエンゲリガルトはバチシチェヴォでこの世を去つた。彼の没後、バチシチェヴォの領地は農業試験場と⁽⁷⁾なつた。

一 『農村から』の概要

本論にはいる前に、『農村から』の全体を簡単にまとめておきたい。まず、それぞれの「農村からの手紙」が書かれた時期を明確にするために、それらが雑誌に掲載された年代をあげる。

「農村からの手紙・一」『祖国雑記』一八七二年五号

(三〇—五〇頁)

「農村からの手紙・二」『祖国雑記』一八七二年六号

(二六一—一八二頁)

「農村からの手紙・三」『祖国雑記』一八七三年一号

(四—一九〇頁)

「農村からの手紙・四」『祖国雑記』一八七四年二号

(二六九—三三三頁)

「農村からの手紙・五」『祖国雑記』一八七六年九号

(五一六八頁)

「農村からの手紙・六」『祖国雑記』一八七八年三号

(五一四二頁)

「農村からの手紙・七」『祖国雑記』一八七九年一号

(二〇一—二四二頁)

「農村からの手紙・八」『祖国雑記』一八八〇年一号

(四一—七二頁)

「農村からの手紙・九」『祖国雑記』一八八一年一号

(一七一—二〇〇頁)

「農村からの手紙・一〇」『祖国雑記』一八八一年二号

(二七七—四一八頁)

「農村からの手紙・一一」『祖国雑記』一八八二年二号

(二二七—三七四頁)

「農村からの手紙・一二」『ヨーロッパ報知』

一八八七年三巻五号(一四七一—一八三頁)

年代を見ても明らかのように、「農村からの手紙」は十五年にわたって書かれている。また、立て続けに発表されることもあれば、およそ五年もの間隔をおくこともあり、発表のされかたも不規則である。雑誌に掲載された総頁数は約五〇〇頁にもなるが、その概略を紹介し

たい。なお本稿では、最新の『農村から』第七版(一九八七年)をテキストとして用いた。

「農村からの手紙・一」(以下、「手紙・一」とする)

では、エンゲリガルトがバチシチェヴォに到着して丸一年が過ぎた冬のある一日の様子をたどりながら、エンゲリガルトの経営スタッフとして共に働く農民たちを紹介している。その描写は非常に具体的であり、彼らがどういふ人物でどのような性格の持ち主なのかまでが、読み手に伝わってくる。「手紙・二」では、エンゲリガルトのもとを訪れる様々な立場や状況の農村の住人たちとの会話を糸口にして、農村の貧困化や地主経営の破綻など、農村のおかれている状況を語っている。「手紙・三」では、エンゲリガルトをして「いかなるいがいみ合いも不愉快なことも起こっていない」と言わしめた、エンゲリガルトと農民との「隣人として」の関係がいかに確立したか、という経過について書かれている。また、異常象と害虫の大発生に悩んだエンゲリガルトが、ロシアにはロシアの農学が不可欠であるということを痛感したいきさつも書かれている。

「手紙・四」の書かれた頃にはエンゲリガルトの農業

経営も成果をあげ始めていた。エンゲリガルトは現実の農民の長所も短所もわきまえた上で彼らと接し、「ある種の相互の信頼関係が出来た」⁽⁸⁾と述べている。「農民は酔っぱらいで、泥棒で、いかさま師で、契約を守らず、借金を返さず、手付け金を取っておきながら仕事を放棄し、怠け者で働きも悪く、農具を壊す」⁽⁹⁾という批判から

農民を弁護する一方で、農村の貧困化の問題では、農民自身の行動にみられる「分離的傾向」も原因の一つであると述べている。「手紙・五」では、その「分離的傾向」について詳しく説明している。それは、農民は共同でまとまって請け負った仕事をするのを嫌い、仕事に取りかかる前に各々の分担をきっちり定め、報酬も仕事量に応じて分配する、という行動のことである。その議論は、露土戦争の最中の農村の様子を描いた「手紙・六」をはさんで、「手紙・七」でも続けられる。「手紙・七」では「アルテリ」あるいは「大家族」による大規模経営の優位性を訴え、その対極に位置する農民の「分離的傾向」や「個人主義」を批判している。そのような否定的な農民像を体现するものとして「バーバ（農民女性）」を描き出している。また、農村の貧困化のもう一つの原

因である地主経営の破綻といわゆる「切取地」の問題に關しても、地主が農民に土地を賃貸することが、地主と農民の双方にとって得になるシステムである、というエンゲリガルトなりの結論を述べている。

「手紙・八」で、行政や官僚が農民の福祉を考えてとった政策が、いかに農村の実状にあわず、農民にとって迷惑以外の何物でもないかということ辛辣に書いた後、「手紙・九」では、それまでに分析してきた農村の貧困化や地主経営の問題についてまとめている。エンゲリガルトの住む地域は土地が痩せており、その上様々な支払義務があるために、たとえ豊作の年でも、農民は翌年の新穀まで食べていかれず、穀物を買ひ足さなければならぬ。そこに、穀物を売る者（地主）と買う者（農民）の利害対立が生じる。農民の困窮がなければ成り立たないような地主経営システムは変えねばならない。地主にとっても農民にとっても得になるのは、地主が自分で経営を行うことをやめ、農民に土地を賃貸することであるという。そのことを証明するために、エンゲリガルトは「手紙・一〇」で、十年間に生活水準が著しく向上した「幸せな地域」と呼ばれる村々の具体例を取り上げてい

る。その一方で、「本物のクラーク」のいる村のことも述べており、「個人主義」や「搾取」という農民の否定的側面も暴露している。

土地を耕作し、有効に利用するすべを心得ているのは農民であり、土地を農民の手に渡し、荒地を開墾し穀物を栽培することが国全体の利益になるということを「手紙・一一」で主張し、その上で土地の生産性を高めるには燐酸肥料が有効であることを解説している。その後、エンゲリガルトは執筆活動と農業経営から距離をおき、燐酸肥料の実験に没頭していた。五年後に発表した「手紙・一二」では、農民土地銀行の設立により、農民が地主から土地を賃借したり買い取ったりすることが可能になったことを高く評価し、自らが行った燐酸肥料の実験の成果もここで報告している。

二 これまでのエンゲリガルト研究

百科事典等の記述では、エンゲリガルトには「社会評論家(Субилист)」という呼称が与えられている。辞典の定義では、「社会評論家」とは時事的な問題、特に社会的・政治的な問題について、主として新聞・雑誌に

ものを書く人間のことである。エンゲリガルト研究の始まりも、「社会評論家」であるエンゲリガルトが誌上で分析し論じている農民・農業問題を扱うものであった。

『農村から』を農奴解放後のロシア農村や農業経営の実態を伝える史料として用い、『農村から』の中でエンゲリガルトが分析し、発言した内容に対して論じたものとして、レーニンによる研究があげられる。『ロシアにおける資本主義の発達』の第三章「賦役経済から資本主義経済への地主の移行」で、特に第六節を「エンゲリガルトの経営の話」とし、レーニンは、エンゲリガルトの行った農業経営では「農業技術の向上と資本主義による雇役の駆逐」⁽¹⁰⁾とが相携えて進んだが、それは「ロシアの私有地経営全体の進化的な諸特徴を、いわば縮図にして反映している」と述べている⁽¹¹⁾。さらに「どういう遺産をわれわれは拒否するか」という論文の中でも、エンゲリガルトが「六〇年代の遺産」すなわち「啓蒙主義的性格」の持ち主か、あるいは「ナロードニキ主義」か、どちらに属するものか、という視点でその見解を分析している⁽¹²⁾。レーニンは基本的にはエンゲリガルトを高く評価しているといってもいいが、その著作の中でエンゲ

リガルトの取り上げ方は、『農村から』の中でエンゲリガルトが語っている彼の経営方式や、農民や農村の状況についての彼の観察に基づく分析内容を、農業経営の「雇役制から資本主義経済への移行」および「ナロードニキか否か」というレーニンなりの枠組みに当てはめて分析するというものである。そして、この枠組みと手法はソヴェエト時代の歴史家たちにも踏襲されてきた。⁽¹³⁾

その一方で、これとは全く違った視点からも『農村から』は読まれてきた。エンゲリガルトの記述が純粹に民俗学的な観点からみても貴重な資料であるということもまた、以前から認識されていたのである。⁽¹⁴⁾ エンゲリガルトの記述を民俗学的資料として用いている研究としては、ロシア人の食生活史に関する研究『パンと塩』(一九八四年)があげられる。⁽¹⁵⁾ 『農村から』の記述のこのような取り上げ方は、エンゲリガルトの社会評論活動に重点をおいたそれまでの研究とは、明らかに一線を画するものであった。やがて、C・A・フライアソンによって、全く新しいエンゲリガルト研究が誕生することになるのである。

フライアソンは、『農村から』の英訳(抄訳)と『農

民イコン——十九世紀後半ロシアの農民像——』という研究を、一九九三年に相次いで出版している。『農村から』の英訳版では、地主による農業経営の問題や燐酸肥料実験などの農業技術革新に関する記述は割愛されているが、それは、訳者の意図が『農村から』を「農奴解放後のロシア農村社会史に関する史料として」⁽¹⁶⁾用いることにあるからである。そして、その意図が具体的にどのようなるものであるかは、『農民イコン』から読みとることができよう。

『農民イコン』でフライアソンが扱っているのは、一八六一年の農奴解放から約三十年間にロシア知識人が作りだした様々な農民イメージである。まさにその時期、知識人の間では「変革期のロシアの未来の鍵を握る存在」⁽¹⁷⁾である農民を説明しようとする研究が盛んに行われていた。フライアソンは、そのような知識人に農民に関する情報を提供した様々なジャンルのテキストについて検討し、テキストが生み出した農民イメージを分析し、さらにテキストやイメージを生み出した源泉(コンテキスト)を説明しようとしている。すなわち、ロシア農民をめぐる様々な言説(ディスコース)の中から、知識人

が農民イメージを生み出してゆく過程を追い、その過程からもロシア社会そのものを解明しようとしているのである。その中で、『農村から』もテクストの一つとして取り上げられている。そして、そこに描かれた農民像を、知識人全体の農民イメージの流れの中に位置づけることによって、エンゲリガルトの描いた具体的に現実的な農民像が、それまでの曖昧なナロードイメージに代わって「新しい核あるいはマスターイメージ」となった⁽¹⁸⁾ということを論じている。すなわち、フライアソンは、エンゲリガルトの描く農民像には知識人全体の農民イメージを変えてしまうほどの説得力があったということ、さらにはエンゲリガルト自身が知識人層に及ぼした影響力の大きさを、あらためて確認しているのである。

フライアソンによれば、エンゲリガルトのものの考え方にはダーウィンの思想が、特に自然淘汰と生存競争の概念が影響しており、そのことはエンゲリガルトの描く農民像からも読み取れる。すなわち、エンゲリガルトは、物質的環境や自然環境に対抗する生存競争という観点から、農民の慣習の多くをそのような闘争に適した行動として解釈しているというのである。⁽¹⁹⁾ エンゲリガルトがロ

シアにダーウィンの思想を紹介した一人であることは知られていることであるが、フライアソンは、それがエンゲリガルトの農民観の中に無意識に織り込まれていることまで指摘しているのである。

フライアソンのエンゲリガルト研究が画期的であるのは、これだけではない。既存のエンゲリガルト研究の枠組みにとらわれることなく、テクストとしての『農村から』にあらためて立ち戻り、その叙述の性格にまで目を向けているのである。『農村から』全体を通して読めば、叙述の性格が何となく変化していることには誰でも気付くであろう。しかし、フライアソンは変化について単に指摘するにとどまらず、「記述的」「分析的」という表現を用いてそのことを説明し、エンゲリガルトの問題意識や関心の所在と関連づけて、テクストから読み取れるエンゲリガルトの社会評論活動の重点のおかれ方の変化についても論じようとしているのである。

三 「記述的」から「分析的」への変化

フライアソンの指摘通り、『農村から』におけるエンゲリガルトの叙述は、時間の経過と共に明らかに変化し

ている。「手紙・一」から「手紙・三」の書かれ方は、エンゲリガルトが見聞したことをありのままに報告している、といったものである。例えば、農村の貧困の問題について書く場合でも、冬の間食物が尽きてしまった農民がパンのかけらを融通し合う相互扶助の慣習を描写したり、金銭や労働と引換に穀物を買いにエンゲリガルトのもとを訪れる農民との会話をそのまま書くことによつて、農村の実状を訴えようとしている。そのことについては、フライアソンも「最初の三つの手紙は最も記述的で、農村生活のスケッチや、農民たちのパーソナリティー、農村の慣習及び慣行について多くのことを描いている」と述べている。⁽²⁰⁾

「手紙・四」からは、農村の貧困化や地主経営の破綻などの問題について、その原因を分析し、論じようとする姿勢が現れ始める。記述的な性格もまだ強く残っているけれども、フライアソンは「より分析的アプローチへの転換を示」⁽²¹⁾すものとして、「手紙・四」と「手紙・五」を位置づけている。確かに、『農村から』の全体を通して読めば、およそこのあたりでエンゲリガルトの叙述の性格が変化していることが感覚的にわかる。フライアソ

ンはなぜこの時点で変化が起きたのか、ということまでは論じていない。この点について、ここで考えてみたい。「手紙・四」を境にしてエンゲリガルトの叙述が「記述的」から「分析的」へと転換したのはなぜであろうか。この問題を考える鍵が、エンゲリガルトが『祖国雑記』に発表した「手紙」以外の論文にあると思われる。エンゲリガルトは「農業の化学的基礎」と題された論文を三回、「ロシア農業の諸問題」を三回、そして「我が経営の歴史から」を四回、『祖国雑記』に書いている。時期的にも内容的にも、ここで問題になるのは、「手紙・三」と「手紙・四」の間に発表された「ロシア農業の諸問題・三——労働力の高騰がわが国の経営の弱点か」(一八七三年二号。以下、「諸問題・三」とする)、及び「我が経営の歴史から」(以下、「経営の歴史」とし、一八七六年一号と三号に書かれた前半の二回を第一部、一八七八年二号と四号に書かれた後半の二回を第二部とする)である。

「諸問題・三」によると、一八七一年にベテルブルグで農業経営者の会議が開催され、そこで発表された「現在の農業経営における最大の弱点は、労働力の高騰であ

る」という宣言を読んだことが、⁽²²⁾ エンゲリガルトにとつての問題提起となったらしい。また、エンゲリガルトは農業経営者たちが「今では農業経営を行うのは不可能だ」「領地は損以外の何ももたらさない」「農業経営を行う価値などない」⁽²³⁾ などと不満を漏らすのをしばしば耳にし、なぜ農業経営を行うのが不可能なのか、本質的な問題はどこにあるのか、ということを探ろうとしていた。

一般に、農業経営を行うのが不可能である原因は、第一に農業労働力の高騰にあり、第二に農民のモラルの低さにあると考えられていた。⁽²⁴⁾ しかし、エンゲリガルトにはそれが根本的な原因ではないことがわかっていたのである。

エンゲリガルトは農民の労働に対する報酬がきわめて低いことを「諸問題・三」で証明し、さらに農民のモラルが知識人と比べても決して低くはないことを「手紙・四」で説明し、そのような批判には全く根拠がないことを論証した。同時に、「手紙・四」では「諸問題・三」に向けられた新聞の批評に対し、あらためて反論している。この二つの論文に書かれた内容は、「経営の歴史」第一部でも繰り返されている。

その上で、「手紙・四」と「経営の歴史」第一部において、エンゲリガルトは、農業経営が不可能となった本質的な原因について論じようとしている。農奴解放前は農奴制に基づく経営システムが確立しており、それに従って順調に農業経営が行われていた。それが、一八六一年に農奴制が廃止されたのにもかかわらず、農奴制を前提とする古い経営システムだけがそのまま残ってしまった。地主による農業経営が破綻したのは、状況が変わっても、農奴制がなければ成り立たないような古い経営システムにいつまでも依存しているからである。だからこそ、エンゲリガルトは新しい時代に適した新しい経営システムの必要性を訴え、自らの農業経営でも新しいシステムを模索しようとしたのである。

エンゲリガルトが農業経営を始めてから五年後の一八七六年に「経営の歴史」の執筆を決意した理由は、エンゲリガルトの新しいシステムに基づく経営が軌道に乗り、順調に成果をあげ、それにより「経営システムに対して行ったいくつかの改革の意義について判断するのに十分なデータが手元に集まった」⁽²⁵⁾ からである。同じく一八七六年に書かれた「手紙・五」でも、亜麻の栽培を新しい

システムに基づいて行い、成功をおさめるに至った過程について語っている。さらに、一八七八年に発表された「経営の歴史」第二部では、エンゲリガルトの領地であるバチシチェヴォを事例として、農奴解放前の状況から農奴解放後の荒廃の過程、そして新しいシステムによりもたらされた領地経営の立て直しの成果を具体的に書いている。すなわち、エンゲリガルトは、「今では農業経営を行うのは不可能である」「農業経営を行う価値がない」ということが誤りであることを立証するために、そして新しい時代に適した新しい経営システムは何か、ということをも自分の経営の実例から明らかにするために、論証のためのデータが十分に集まった時点で、「経営の歴史」を書き始めた。エンゲリガルトにとってこの論文は、まさにその題名が示す通り、農業経営を中心とする自らの活動を振り返り、その意義を確認するものであったのである。

『農村から』の叙述が「記述的」から「分析的」へ変化を見せ始めた時期は、このようにエンゲリガルトにとっても一つの区切りとなった時期と一致している。「経営の歴史」を区切りのつもりで書いたということは、そ

の第二部の最後の部分で、自分の行ってきた経営はあくまでも過渡的なものであり、将来は自分の手で耕す人間が共同で農業経営を行うようになるべきだ、ということを書いていることから明らかである。⁽²⁶⁾ それこそが、前に述べた「インテリ・ムジーク」によるアルテリ村の構想へつながるものである。「経営の歴史」第二部に引き続いて書かれた「手紙・七」にも、「インテリ・ムジーク」に寄せるエンゲリガルトの期待が率直に語られている。

三回目、そして最後のアルテリ村が完全に崩壊したのが一八八四年のことであった。このアルテリ村の不首尾は、まず間違いなく、エンゲリガルトが農業経営を娘のヴェーラに任せ、磷酸肥料の実験に没頭した原因の一つであったと思われる。『農村から』の最後の方でも、磷酸肥料の重要性やその実験の成果について書かれており、磷酸肥料の実験がエンゲリガルトにとっての最大の関心事となっていたことが感じられる。フライアソンは「彼は農民の持つ実的な知恵に対するほとんどくもりのない尊敬から始めたが、ロシア農業にとっての万能薬としての鉋物肥料という応用科学に対する新たに復活

した信仰へ、人生の最後で戻ってしまった⁽²⁷⁾」としている。「土地は農民の手に渡すべきだ」ということを主張していることからしても、エンゲリガルトの農民に対するある種の尊敬の念が完全に失せたとはいえられないが、いずれにせよ、化学者としてのキャリアを断ち切られて農業経営を始めたエンゲリガルトであったが、最後に再び化学者へと回帰したというのは、興味深い事実である。

四 叙述の性格の変化の持つ意味

エンゲリガルトが「社会評論家」と呼ばれているということは前にも触れたが、実は、事実をありのままに記述することによって社会に訴えようとする「記述者」も、データを集めて分析し、議論し、社会に向かって発言しようとする「分析者」も、どちらのタイプも「社会評論家」なのである。『農村から』の叙述に「記述的」と「分析的」の両方の性格が現れているということは、「社会評論家」としてのエンゲリガルト自身に「記述者」と「分析者」の両方の性格があり、時間の経過と共に前者から後者へと重点を移しているということの意味している。エンゲリガルトの内面的な区切りが『農村から』の

叙述の変化をもたらしたとすれば、それぞれの時点でのエンゲリガルトの関心の所在が記述の性格を左右しているということになるのである。

『農村から』の冒頭で「私は農業経営について以外には全く何も考えたり、話したり、書いたりすることは出来ない。私のすべての関心も、私が日常会う人々のすべての関心も、薪や穀物や家畜や厩肥などに向けられている。他のことなど我々には関係ないのだ⁽²⁸⁾」と書いているように、「手紙・一」から「手紙・三」に書かれている時期のエンゲリガルトにとっては、農業経営が最大の関心事であった。新しい経営システムを模索し、農業経営を何とか軌道に乗せるためにも、農村の置かれている状況を正確に把握し、経営上のパートナーたるべき農民のことを正しく理解することが必要不可欠であった。フラリアソンは「彼が農民の流儀を学んだのは、農業経営上の利益から、すなわち放置されていた領地を利益の上がる農場に変えるために、近隣の農民と共に働く必要性から生じた副産物であった⁽²⁹⁾」としているが、おそらくそれは正しい指摘であろう。エンゲリガルトの真剣かつ正確な観察眼が、生き生きとした農民たちの姿を伝える記述

を生み出したのである。

また、ペテルブルグから農村に移り住んで間もない頃のエンゲリガルトにとっては、農村はある意味で全く異質な社会でもあった。だからこそ、初期の「手紙」には、あたかも異文化に接したときのような素朴な驚きや新たな発見が語られているのである。しかもそれは、現実の農民と交際し、その慣習やものの考え方を意識的に学ぼうとしたからこそ得られた発見であり、驚きであった。農村生活も長くなると、エンゲリガルトにとって農村社会がそれほど異質と感ぜられなくなり、農民の慣習やものの考え方が当たり前に思われるようになっていったとすれば、そのような素朴な驚きや新たな発見についての記述が時間が経過するにつれて減少しているのも当然のことであろう。

エンゲリガルトの当初の目標であった新たな経営システムの確立が一段落すれば、自信もつき、気分的にも落ち着き、物事を考察したり過去を省みたりする余裕も生まれるであろう。元来知識人であるエンゲリガルトが新たな経営システムの次に考えたことは、ロシア農業の将来であり、「インテリ・ムジーク」によるアルテリ村の

理想であった。

ほぼ全体を通じてエンゲリガルトが分析しようとしているのは、農村の貧困化の原因であり、地主経営の破綻の問題である。そして、なぜ貧困化が起こるのか、なぜ地主経営が破綻したのか、という分析を通じて、今後のロシア農業のあるべき姿について、農民と地主の双方にとって得になる農業経営について、提言しようとしているのである。レーニンも含めたほぼ同時代の知識人にとっては、エンゲリガルトの分析や提言の内容の是非が重要な問題であったと思われる。なぜならば、エンゲリガルトの発言は、当時の知識人誰もが考えていた「ロシアとはなにか、ロシアの将来はどうなるのか」という問題に対して、エンゲリガルトなりに出した答えといえるからである。したがって、エンゲリガルトの分析的な叙述の向こう側には、当時のロシア知識人全体が何を考え、何について議論していたのが、透けて見えるのである。その意味では、記述的な叙述もまた時代の要請であった。それは知識人が「ロシア農民とは何者か」という問題を考える素材であり、それをもとにして知識人にとつての農民イメージが形成されていったのである。勿論、

農民や農村に関する記述的な叙述(スケッチ、ルポルターージュ)を書き残した者は多いが、特にエンゲリガルトの叙述は、フライアソンの言葉を借りれば、「およそ二十年間にわたってロシア農民精神に関する言説(ディスコース)をほぼ決定」⁽³⁰⁾してしまいうほどに説得力があったのである。

- (1) これまでに、『農村から』は革命前に三回(一八八二年、一八八五年、一八九七年)、革命後にも四回(一九三七年、一九五六年、一九六〇年、一九八七年)単行本として出版されている。第一版と第二版に限っては、最後の「農村からの手紙・一二」が書かれていない段階で出版されたために、「手紙・一」までを収めている。雑誌に掲載された段階と単行本とは、その内容に重大な変更はない。ただし、「手紙・五」に書かれているエンゲリガルトの飼い犬の話について、わずかに省略されている。
- (2) エンゲリガルトの経歴は以下のものを参照してまとめた。Л. Л. Балашев, "Александр Николаевич Энгельсгардт", А. Н. Энгельсгардт, *Из деревни. 12 писем. 1872-1887*. М., 1960, стр. 3-16; П. В. Волобуев, В. П. Данилов, "Предисловие", А. Н. Энгельсгардт, *Из деревни. 12 писем. 1872-1887*. М., 1987, стр. 5-28; П. Я. Нечумов, *Александр Николаевич Энгельсгардт: Очерк жизни и*

деятельности, Смоленск, 1957; И. Филоненко, "Александр Николаевич Энгельсгардт (1832-1893)", *Семь лет и хранения: Очерк об известиях агрономов, почвоведов, селекционеров, генетиков, экономистов-аграрников; отрывки из документов, научных статей*, М., 1992.

- (3) 化学者としてのエンゲリガルトに関する研究では、Н. С. Козлов, "Научная и общественная деятельность А. Н. Энгельсгардта", *Труды института истории естествознания и техники*, т. 30, М., 1960, стр. 111-134; 梶雅範「十九世紀ロシアにおける化学者集団の形成——ロシア最初の専門科学雑誌『H. ソコロフとA. エンゲリガルトの化学雑誌』——」『科学史研究』一八七号、一九九三年七月八月、一二九—一四一頁がある。

(4) А. Н. Энгельсгардт, *Из деревни. 12 писем 1872-1887*, М., 1987, стр. 190.

- (5) エンゲリガルトがバチシチエヴォに到着してから約二ヶ月後の一八七一年三月三日付の手紙の中で、「サルティコフ・シチエドリンは次のように書き送っている。「おそらく、自由になる時間が見つけれられることでしょうか、その時間を有効に利用して、とりわけそちらの地で行うには最も都合の良い仕事を進めることが出来るのでは」と思います。しかも、特に一八六一年以前と比較した地主経営や農民の経営の現在の状況を描くのに好都合なのではないでしょうか。勿論、このテーマをあなたの判断で広げることが出来ます。つまり、わが国の農村

- のあらゆる生活習慣をそこに加えることも可能なのです。例えば、精神的および全面的な経済状況、学校の状態、酒場、現在の税制の及ぼす影響、農民裁判所の状態、手工業や商業、ゼムストヴォの活動、等々。これはあなたに深くしよの論文のための材料を提供してくれることとして、
う。M. E. Салтыков-Щедрин, *Собрание сочинений в двадцати томах*, т. 18, ч. II, стр. 73.
- (9) 上記のようなナローユニキ的な思想と活動の面からエンゲリガルトを論じているのが、ウォートマンによる研究である。Richard Wortman, *The Crisis of Russian Ruralism* (Cambridge, 1967), pp. 35-60.
- (7) Энгельгардт, *Из деревни*, стр. 102.
- (8) Там же, стр. 149.
- (6) Там же, стр. 150.
- (10) В. И. Ленин, *Сочинения*, изд. 4-ое, т. 3, 1953, стр. 180.
- (11) Там же, стр. 183.
- (12) В. И. Ленин, *Сочинения*, изд. 4-ое, т. 2, 1954, стр. 474-480.
- (13) エンゲリガルトについて僅かに言及してあるものはあっても、エンゲリガルトを正面から取り上げて論じている研究は意外に少ない。К. Т. Пилицына, "Программа экономического хозяйства в 'Гнездах из деревни' А. Н. Энгельгардта", *История русской экономической мысли*, т. II, ч. I, М., 1959, стр. 335-351. 日本ではエンゲリガルトを取り上げた研究としては、山本敏「エンゲリガルトについて」『スラヴ研究』第六号、一九六二年、二七—四二頁)がある。
- (14) С. А. Токарев, *История русской этнографии*, М., 1966, стр. 283.
- (15) R. E. F. Smith and David Christian, *Bread and Salt: A Social and Economic History of Food and Drink in Russia* (Cambridge, 1984).
- (19) Cathy A. Frierson (Transl. & ed.), *Alexander Nikolaevich Engelgardt's Letters from the Country* (Oxford, 1993), p. viii.
- (17) Cathy A. Frierson, *Peasant Icons: Representations of Rural People in Late Nineteenth-Century Russia* (Oxford, 1993), p. 8. 44. この本の書評として、『ロシア史研究』五五号、一九九四年、八三—九〇頁の拙稿を参照せよ。
- (81) *Ibid.*, p. 77.
- (61) Frierson, *Letters*, p. 16.
- (20) *Ibid.*, p. 14.
- (21) *Ibid.*, p. 17.
- (22) А. Н. Энгельгардт, "Вопросы русского сельского хозяйства III — Дороговизна для рабочих рук составляет большое место нашего хозяйства?", *Отечественные записки*, 1873, No 2, стр. 199.
- (23) Ето же, "Из истории моего хозяйства", *Отечественные записки*, 1876, No 1, стр. 85.

- (24) Там же, стр. 85.
(25) Там же, стр. 87.
(26) Его же, "Из истории моего хозяйства", *Отечественные записки*, 1878, No 4, стр. 321-322.
(27) Frierson, *Letters*, p. 14.
- (27) Энгельгардт, *Из деревни*, стр. 42.
(29) Frierson, *Letters*, p. 14.
(30) Frierson, *Recueil Icons*, p. 77.
(一橋大学大学院博士課程)